



二五 隆家刀夷の侵入を退く(同)……………一〇五

二六 道長とその一家の栄達(道長伝より)……………一〇七

二七 道長の詠歌(同)……………一二六

二八 道長の心だましひ(同)……………一二九

二九 道長の相好容儀(同)……………一三三

三〇 道長、雌伏時代より伊周を威圧す(同)……………一三五

三一 道長の関白宣下は一条帝御母女院の奏請(同)……………一三六

三二 宮宮の法成寺諸堂参拝(同)……………一三九

三三 河内の聖、同金堂供養参拝の感想(同)……………一四三

三四 世継、禊子内親王の行末を予言(同)……………一四四

【昔物語抄】

三五 光孝天皇即位の日の思ひ出……………一三七

三六 醍醐天皇の大原野行幸の思ひ出……………一三九

三七 大井川の御幸と行幸とのをりの秀歌……………一四〇

三八 鶯宿梅……………一四一

三九 大鏡巻末……………一四三

【附録】

京都附近地図……………一四二

平安京図……………一四六

大内裏図……………一四七

内裏図……………一四八

清涼殿図……………一四九

目次終り……………一四九

はしがき

本書は、高等学校・大学教養課程・短期大学等の国語科用教科書として編集したものである。本書編集の態度は、平安朝文芸の背景なり温床であった当時の宮廷貴族の一般生活を知らせる、こういう所に重点をおいた。大鏡の内容は、文徳天皇から後一条天皇の万寿二年まで、天皇十四代百七十六年間にわたる皇室を中心とする貴族の歴史に関するものであるが、単に史実を配列したり修飾したのではなく、道長はじめ当時の有力な人人や家について、その人間的ないし社会的な面影を浮き彫りに描き出そうというのが、作者の意図であったように思われる。だから読者は、大鏡に語られている事実の一つ一つを史実として信用するには及ばない。のみならず、それはかえって危険でさえあるかもしれない。で、本抄本に大鏡章段を抄出するには、史実味の厚薄ということには度外において、もっぱら平安朝貴族社会一般の生活情況なり生活気分に関する事項をとることにしたのである。これは広く平安朝古典を理解する素地をつくるのに役だつと思つたからである。

大鏡の特色としておもしろい点は、貴族社会の生活を語りながら、その語り手(世継や侍)の口をとおして、これら貴族生活に対する批判をしており、その批判の標準が、庶民的な一般社会道德のうえにおかれているらしいことである。こういう庶民的な批判が平安朝文学のうえにあらわれたのは今昔物語あたりからであるが、その点で、大鏡はよほど今昔物語に時代的接近を思わせるものがある。それに、大鏡の話のなかには意外に説話的要素が多い。その点からも庶民的なものが、この作品の底を流れているように感じられる。本抄本十七章(七六ペー1ジ)に見える花山上皇に関する話、ことに、冷泉上皇の近火御避難のありのユーモアに富んだ話などは、皇室に対する一般庶民の遠慮のない親近感が流露していて、まことに気持よく読まれる。こういう話は事実でない

と申ししをりの小舎人童大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母后の宮の御方の召し使ひ、高名の大宅の世継とぞいひ侍りしかしな。さればぬしの御年は、おのれにはこよなうまさり給ふらんかし。みづからは小童にてありし時、ぬしは二十五六ばかりの男にてこそはいませしか」といふめれば、世継、「しかしか、さ侍りし事なり。さてもぬしの御名は如何にぞや」といふめれば、「故太政大臣殿にて、元服つかまつりし時、『きんちが姓は何ぞ』とおほせられしかば、『夏山となん申す』と申ししを、やがて繁樹となんつけさせ給へりし」などいふに、いとあさましくなりぬ。

誰れも少しよろしきものどもは、見おこせ、居寄りなどしけり。年二十ばかりなる生侍めきたる者の、せちに近く寄りて、「いで、いと興ある事いふ老者達よな。更にこそ信せられね」といへば、翁二人、見交してあざわらふ。繁樹と名のるが方さまに見やりて、「ぬしは幾つといふ事覚えずといふめり。この翁どもは覚え給ふや」と問へば、「更にもあらず、一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁樹は百四十には及び

てさぶらふらめど、やさしく申すなり。おのれは水尾の帝のおりおはします年の正月の望の日生れて侍りしかば、十三代にあひ奉りて侍るなり。けしうはさぶらはぬ年なりな。まことと人人おぼさじ。されど、父がなま学生に使はれ奉りて、下臈なれども都ほとりといふ事侍れば、目を見たまへて、産衣に書き置きて侍りける、いまだ侍り。丙申の年に侍り」といふも、げにと聞ゆ。

今ひとり、「なほも翁の年こそ聞かまほしけれ。生れけん年は知りたりや。それにていと易く数へてん」といふめれば、「これはまことの親にもそひ侍らず、こと人のもとに養はれて、十二三までぞ添ひて侍りしかば、はかばかしくも申さず。ただ『我は子生むわざも知らざりしに主の御使ひに市へまかりしに、又私にも銭十貫を持ちて侍りけるに、にくげもなき児を抱きたる女の、『これ人に放たんとなん思ふ。子を十人まで生みて、これはし、十人の子にて、いとど五月にさへ生れてむつかしきなり』と言ひ侍りければ、この持たる銭にかへて来にしなり」と。

『姓は何とかいふ』と問ひ侍りければ、『夏山』とは申しける。さて十三に

一 近衛の中・少将などが召しつれる少年。  
 二 ここは二人称代名詞として使われた体言。「あなた」の意。  
 三 宇多天皇の御代。  
 四 宇多天皇の母后で、光孝天皇の后だった班子(ハンシ)女王のこと。  
 五 有名な。  
 六 私。  
 七 「童」とは、髪を結びあげず、放してある少年少女をいう。  
 八 童形を改め、結髪して冠をつけ、成人の服を着、実名をつける式。いわば成人式である。  
 九 対称代名詞。この時代では、めしたに使うのが例。お前・なんじ。  
 一〇 そのまま。又は、すぐの意の副詞。ここは前者の例。夏山という姓を、そのまま縁語として、繁樹と名づけた。  
 一一 「あさまし」は、あきれかえるような状態をいう。  
 一二 相当な身分の者。「よろし」は「よし」よりは程度が低く、標準並みなのをいう。ここは、いやしい者を中心とする集りだから、なかではまあ良いの意。  
 一三 「生」は「なまめく」、「なまめかし」の語根の「なま」。ここは接頭語。出身のよさそうな侍。「侍」は、貴人の従者。のち、武士のみを指す語となった。  
 一四 いや、どうも。  
 一五 とても・でんで。  
 一六 いうまでもありません。

一 謙遜(ソン)して。  
 二 私・私自身。  
 三 清和天皇。その御退位は、貞観(ジウガン)十八年(西暦九九七)。  
 四 満月の日。太陰暦では毎月十五日前後。  
 五 清和、陽成(セイ)、光孝、宇多、醍醐(ダイゴ)、朱雀(スザク)、村上、冷泉(セイ)、円融、花山、一条、三条、後一条。  
 六 悪くも。  
 七 式部省の管下にあった大学寮の学生。  
 八 当時のコトワザであろう。帝都の人は、身分のいやしい者でも自然文化的で知識に富むという意。  
 九 清和天皇の貞観十八年(八七〇)。  
 一〇 養父が。  
 一一 「にくげ」は、みつもまない。それを打消したから、ちよっとかわいいらしいの気持。  
 一二 「これ」は、ちごを指す。「し」は強めの助詞。  
 一三 源為憲(タメノリ)・円融帝ごろの人の世俗諺文(セゾクゲンブン)に、五月の子は、親を害する由が見える。元来は、中国の思想であるが、平安時代には、日本でも、そうした事が一般に信じられたのである。  
 一四 きみが悪いのです。